

研究課題	SDGs 未来都市舞鶴市を通して地方創生を考える
副題	～ICT で人と繋がる。社会と繋がる。教科が繋がる。誰一人取り残さない教育をめざして～
キーワード	SDGs 地域貢献 キャリア教育 ICT 活用 教科横断型授業
学校/団体 名	私立聖ヨゼフ学園日星高等学校
所在地	〒624-0913 京都府舞鶴市上安久 381
ホームページ	https://www.nisseihs.ed.jp

1. 研究の背景

本校は京都府舞鶴市にあるカトリックの学校である。本校普通科総合コースには大学進学から就職まで幅広い進路を希望する生徒が在籍し、中には中学段階の基礎学力が十分定着していない生徒もいる。また、自己肯定感が低く、学習に対して受け身で、学ぶ意味や楽しさを見失っている生徒も少なくない。これまでは、日常の教科の学習と地域社会の課題が繋がることはなかった。

2018 年より SDGs の「誰一人取り残さない」との考えを取り入れた教育活動の研究を始めた。

2019 年 7 月に舞鶴市が SDGs 未来都市に選ばれ、SDGs の考えをもとに地域について学び、地域貢献できる人材を育てることを産学官が協力してできる土台ができた。ICT を活用し、教科や「総合的な探究の時間」での学びを地域と繋ぐ。こうした取組で生徒の学ぶ姿勢を変化させ、地域貢献によって自己肯定感を高めたいと考えた。

2. 研究の目的

- ①SDGs の考え方をもとに ICT を活用し市役所、地元企業を巻き込んだ「総合的な探究の時間」を計画。取組の中で地域貢献できる生徒を育てることにより、生徒の自己肯定感は向上するのか。
- ②ICT を活用した「教科横断型授業」により生徒がより深く学び、学習意欲が向上するのか。

以上 2 点を調査し、学習指導要領にある教育内容と教育活動に必要な人的・物的資源として地域等の外部の資源を効果的に組み合わせること、教科横断的な視点で教育内容を組織的に配列していくことを目的とした。

3. 研究の経過

地域貢献できる生徒を育てるためには、生徒が地域の「魅力・課題・展望」を理解することが必要である。そこで市役所(政策推進部 企画政策課)、地域の若者による町づくり団体(一般社団法人 KOKIN)、地元企業(13 社)に協力していただき、産学官が繋がる「総合的な探究の時間」のカリキュラムを作成した。各学年の学期ごとの流れを 1 年生(表 1)、2 年生(表 2)、3 年生(表 3)に示す。

表 1) 1 年生 総合的な探究の時間

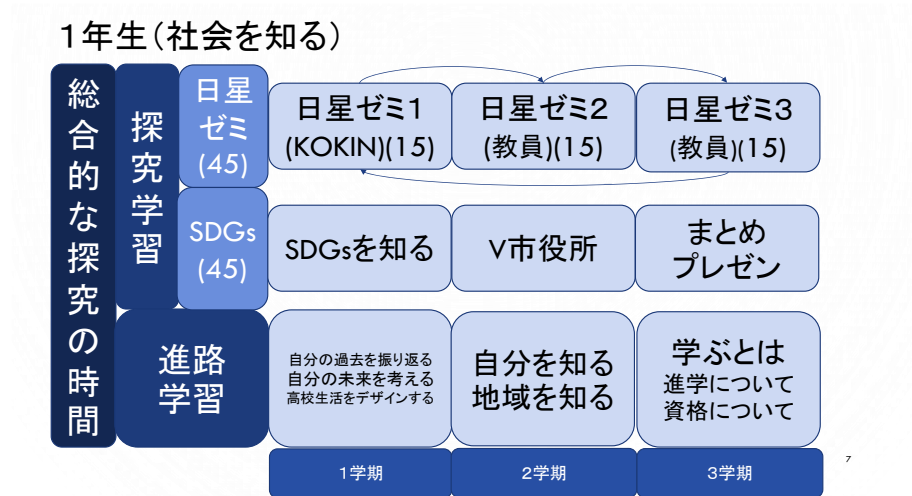


表 2) 2 年生 総合的な探究の時間

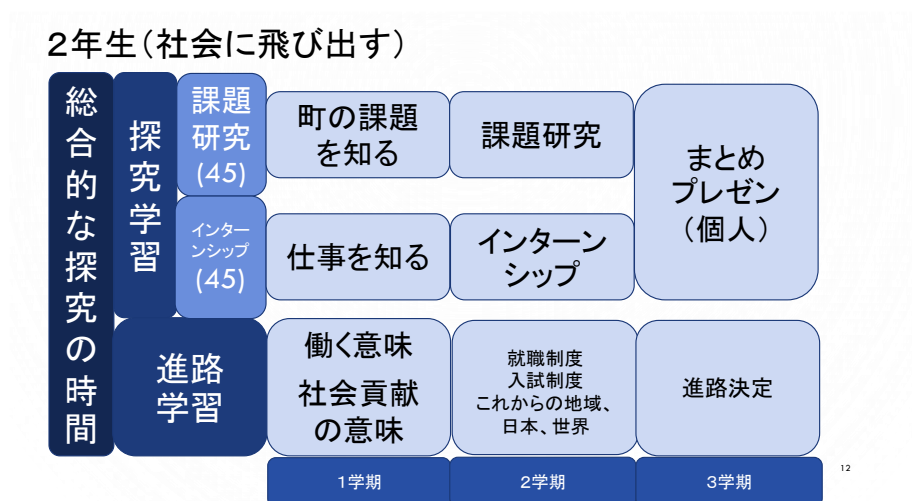
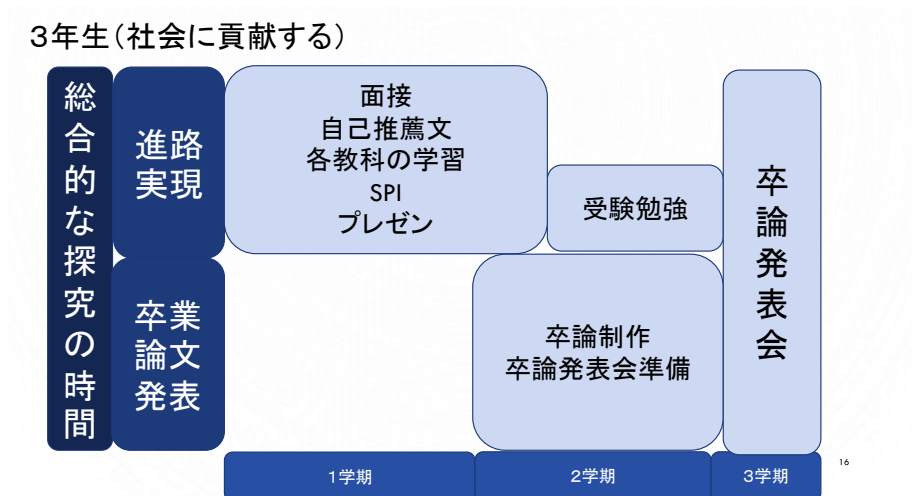


表 3) 3 年生 総合的な探究の時間



4. 代表的な実践

「総合的な探究の時間」

1 年生

①「SDGs・V 市役所」

(1 学期)SDGs について学び、SDGs の視点を取り入れることがまちづくりにどのように役に立つのかを考える。まちにおける市役所の役割を学ぶ。(2 学期)市役所各課より舞鶴市の課題を提案され、SDGs の視点を持ちながらアンケートや文献調査、インターネット調査、フィールドワークなどを通して課題の解決方法を考える。(3 学期)自分たちの提案をスライドにまとめプレゼンテーションをする。(グループ発表)



SDGs カードゲーム



市役所各課からの課題提案



フィールドワーク



V 市役所報告会

②「日星ゼミ」

(1 学期, 2 学期)「地域課題の発見」「地域愛の育成」「イノベーション力の養成」をねらいに、「一般社団法人 KOKIN」と連携したゼミで、生徒が地域に出て、リノベーションされた建造物に触れ、まちづくりを考える。



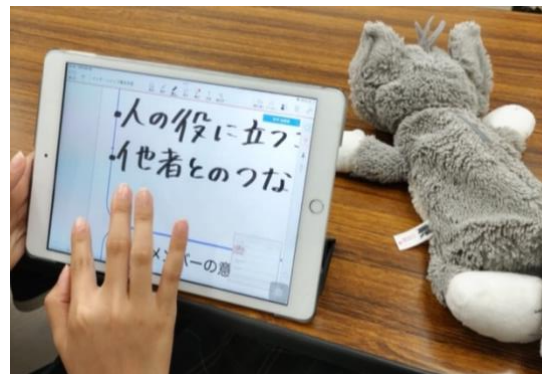
2 年生

①「インターンシッププログラム」(地域で活躍する大人から地域課題を学ぶ)

(1 学期)地元で活躍している事業主に講演をしていただき、「働く意味」や「働く喜び」について考える。(2 学期)「仕事とは誰かの役に立つこと」「社会はみんなの仕事で成り立っている」ことを知った上でインターンシップを行い、働く喜びを実感し、社会の一員として役立っていることが自己肯定感に繋がることを知る。(3 学期)インターンシップの「地元愛」や「働く喜び」についてプレゼンテーションをする。(個人)



キャリア講演会



インターンシップ事前指導



インターンシップ



インターンシップ報告会

3 年生

①「卒業論文発表会」

(2 学期)高校生活 3 年間の経験や学びを卒業論文にまとめ、2 学期末に 1, 2 年生を聴衆にむかえ卒業論文発表会を行う。(個人)





卒業論文発表会

「教科横断型授業」

教科横断コーディネーターが SDGs の 17 の項目をもとに教科横断ができる単元を各教科に示し、各教科担当が実践を行った。

学習アプリ「Metamoji Classroom」の活用により担当クラスで他教科の先生がどのような教材を使って生徒たちに授業を行なっているのかを簡単に知ることができる。従来の紙ベースでの学習では教科間が分断されていたが、ICT の活用により教科が「繋がる」ことが出来た。

また、授業内で他の生徒のノートの閲覧の可否を簡単に切り替えることができるため、状況に応じて「個人で考える」「他の生徒の考えを共有して再考する」の切り替えが容易になった。

ICT を活用した「教科横断型授業」により学習内容を単に「知識理解」で終わるのではなく「学ぶ意味」を考えることができる授業が行えた。

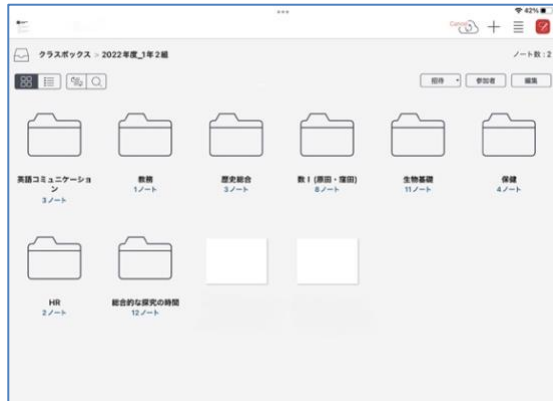
実践例)「平和とカレー」

- ・歴史総合「欧米の市民革命と西洋の衝撃」
- ・英語コミュニケーションⅠ「Curry Travels around the World」

上記2つの単元を学習後に「平和とカレー」のタイトルでの「教科横断型授業」を行った。産業革命時にインドよりイギリスに持ち帰られた「カレー」をもとに当時の時代背景を考え、現代にも存在する「人や国の不平等」について考えた。



「平和とカレー」の授業風景



アプリにより各教科の教材を「見える化」



状況に応じて生徒間の教材を「見える化」

5. 研究の成果

1 年生

「総合的な探究の時間」の成果

市役所、KOKIN の協力のもと行なった1年間の「総合的な探究の時間」を通して生徒の地域愛が向上し、身近な大人の好意的な関わりを通して生徒の自己肯定感が高まったと考えられる。

SDGs の考え方をもとに、地元舞鶴の魅力についての発見・再確認できた生徒が多く見られた。舞鶴を活性化させようと活動している大人と交流することにより、このまちを良くするためにどうすれば良いのかを考え、その結果「自分たちにもできることがある」ことに気づいた。

また、プレゼンテーション大会を通じて、協力いただいた市役所や企業からフィードバックをしてもらったことで「自らの参加によって社会現象が変えられるかもしれない」と社会に役立つことにやりがいを感じた生徒も多く見受けられた。

アンケート結果、自己評価表を(表4)～(表8)に示す。

表4) SDGs に関して (1年前と比べて)

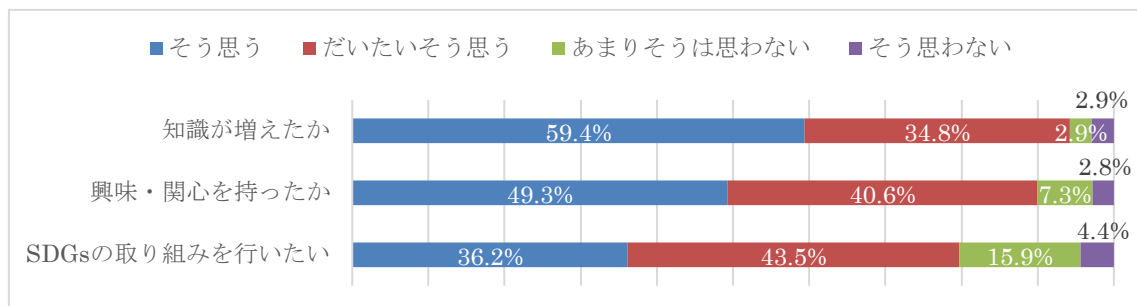
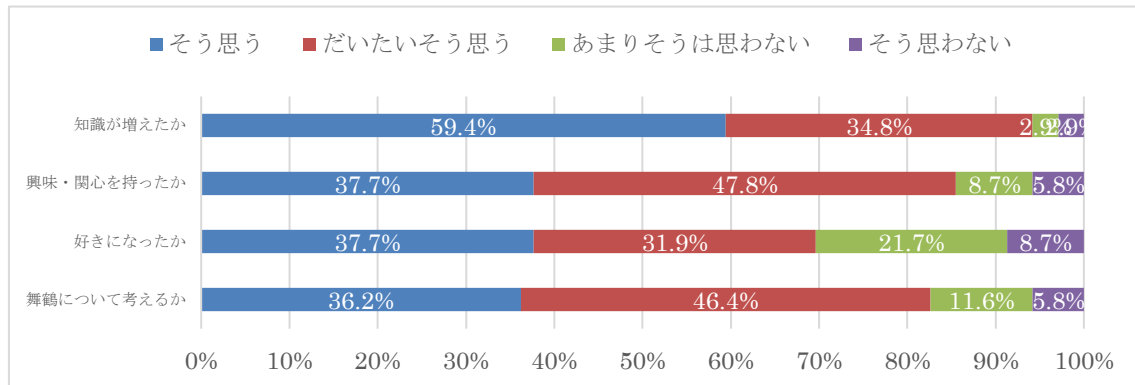
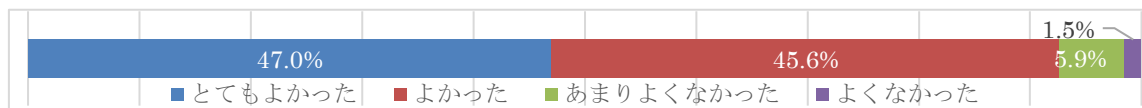


表 5) 地元舞鶴に関して



SDGs について多くの生徒が知識を得ることにより興味・関心を持ち、行動に移したいと考えていることがわかる。また、舞鶴について新たな知識を得ることにより興味・関心を持ち舞鶴を愛し地域を活性化させたいという気持ちが生まれていることが分かる。

表 6) プレゼンテーションをしてみてどうだったか



生徒たちが意見を出し合い創意工夫をしながら1つのものを作り上げ、それを発表することにより自己肯定感が育ち、「自らの参加によって社会現象が変えられるかもしれない」と思えるきっかけが出来た。

自由記述

「自分があまり得意ではなかった人前でのプレゼン。とてもいいパフォーマンスができました。自分に足りないのは人に意欲を持たせる能力です。また機会があれば是非参加したいです。他のグループの方たちも、とても個性的なプレゼンもあり勉強になりました。いい機会をありがとうございました」

「舞鶴のことで知らないこともたくさんあるなか、今日の発表を通してたくさん知ることができました。プレゼンをする中で大切なこと、どうしたら相手に伝わるのかを知ることができました。その上でグラフの量、写真の量をただ多くしたらいいのは間違いだと気づきました」

「最初は自分もズルいい舞鶴を知らなかったけど、学習していくうちにだんだんわかっていきました。また、勉強していくうちに自分も知らない舞鶴市のいいところがあると知ってもっと勉強をしていきたいと思いました。また舞鶴市について調べてみようと思いました」

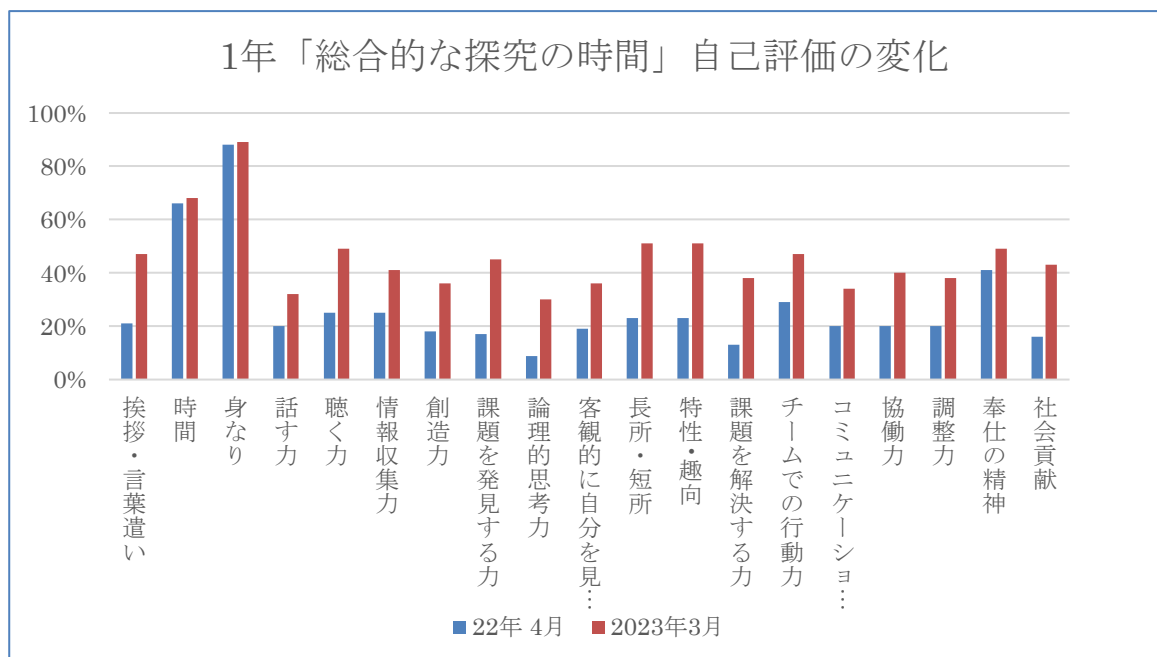
「スライドを作る中で上手いかないことの方が多かったけど、最終的にみんなでまとまって発表することができて嬉しかったです。また、いつも話さない人ともコミュニケーションを取ることができて仲が深まったし、いつもより達成感があって自分的には良かったです。見ているみんなに、どうしたら伝わりやすいのか考えることが出来ました」

「最初は苦手な分野だから嫌だなと思っていたけど、今回やってみて終わった後の達成感がすごかったし、人前で発表するというのに少しは慣れたかなと思いました。人前で発表するというのはこの長い人生の中でたくさんあるし、できるように頑張っていきたいと思いました」

「総合的な探究の時間 自己評価ルーブリック」

生徒の自己評価については「総合的な探究の時間 自己評価ルーブリック」を活用した。ルーブリックは「基礎力」「思考力」「実践力・キャリア」3つのブロック(計19項目)からなり、自分の今の位置を level 0～level 4 で選択する。1年生で「基礎力を level 3」、2年生で「すべての項目を level 3」にすることを目標とした。(表7)～(表12)にその差分を示す。

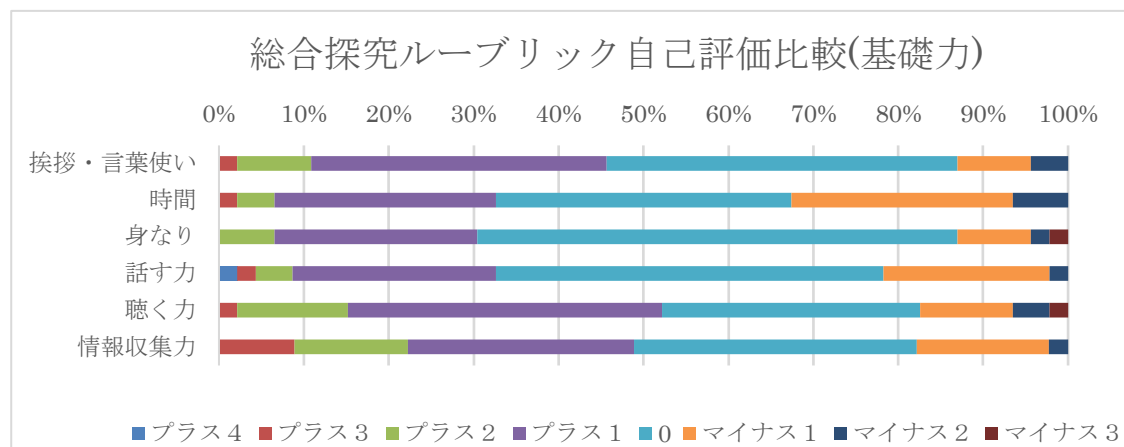
表7)「総合的な探究の時間 自己評価ルーブリック」の結果



「総合的な探究の時間自己評価ルーブリック」が level 3, level 4 に達している割合を 22 年 4 月と 23 年 3 月を比較した。どの項目においても伸びている。特に、「課題を解決する力」、「長所・短所」、「特性・趣向」が 28%と最も伸び率が高い。

しかし、1 年のゴールイメージである基礎力(「挨拶・言葉遣い」～「情報収集力」)では6項目中4項目が level 3 に達している割合が 50%以下となっている。基礎力が身につけられていないことが伺える。

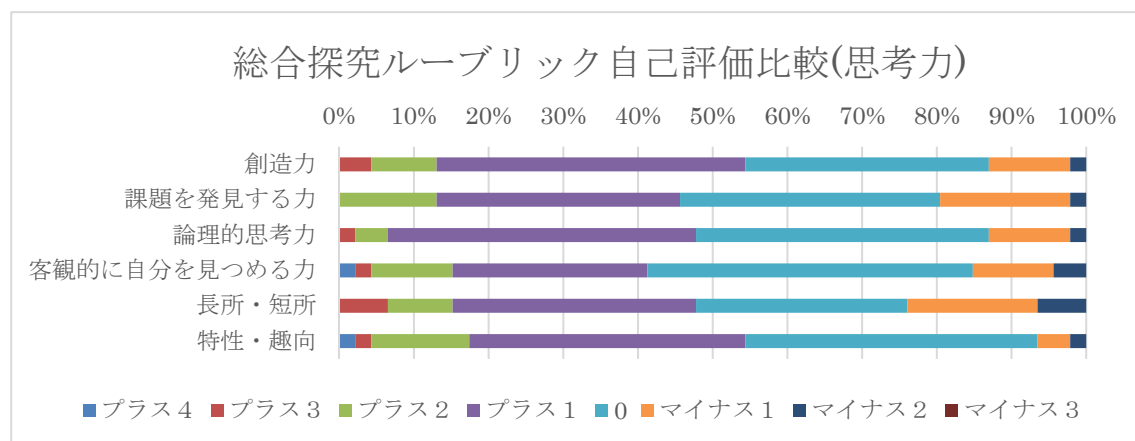
表 8)「総合的な探究の時間 自己評価ルーブリック」(基礎力)



自己評価ルーブリック（基礎力）について各項目のポイントアップ(ダウン)について 22 年 4 月と 23 年 3 月を比較した。

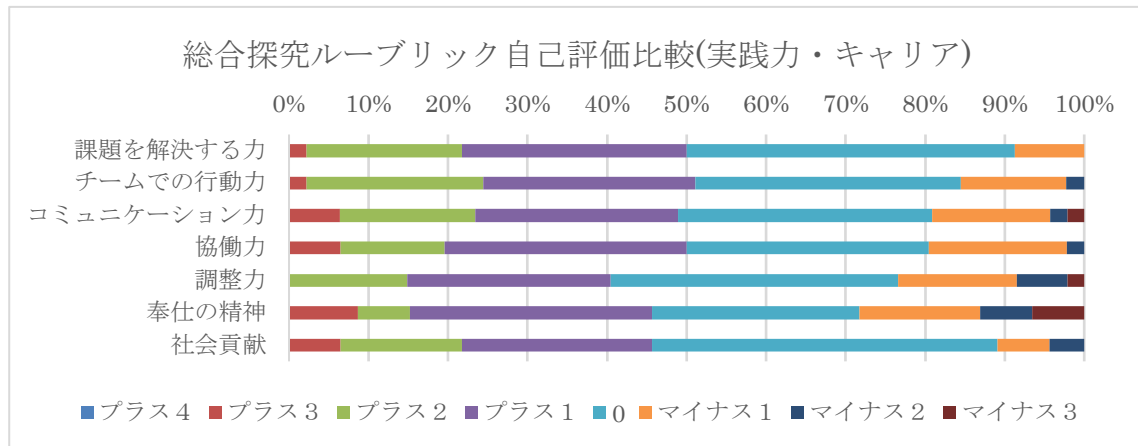
ポイントアップの上位が「聴く力」「情報収集力」であった。「時間」、「身なり」については 22 年 4 月の段階でかなりの割合で level 3 に達しているため伸びが少なかったと考えられる。「話す力」についての伸びが低く、自分の意見を伝え、相手の反応に返答できる活動をより多く取り入れることが必要であると分かった。

表 9)「総合的な探究の時間 自己評価ルーブリック」(思考力)



ポイントアップの上位が「創造力」「特性・趣向」「長所・短所」である。探究活動を行う中で「創造力」が身についたと感じた生徒が多いことが分かる。また、探究を行う中で自分の特性、長所を考えてそれを活かす学びが出来たことにより、自己肯定感に繋がったと考えられる。「長所・短所」や「課題を発見する力」でマイナスポイントが目立った理由として、自己を客観視できたことにより自分の判断基準が上がったためだと考えられる。

表 1 0)「総合的な探究の時間 自己評価ルーブリック」(実践力・キャリア)



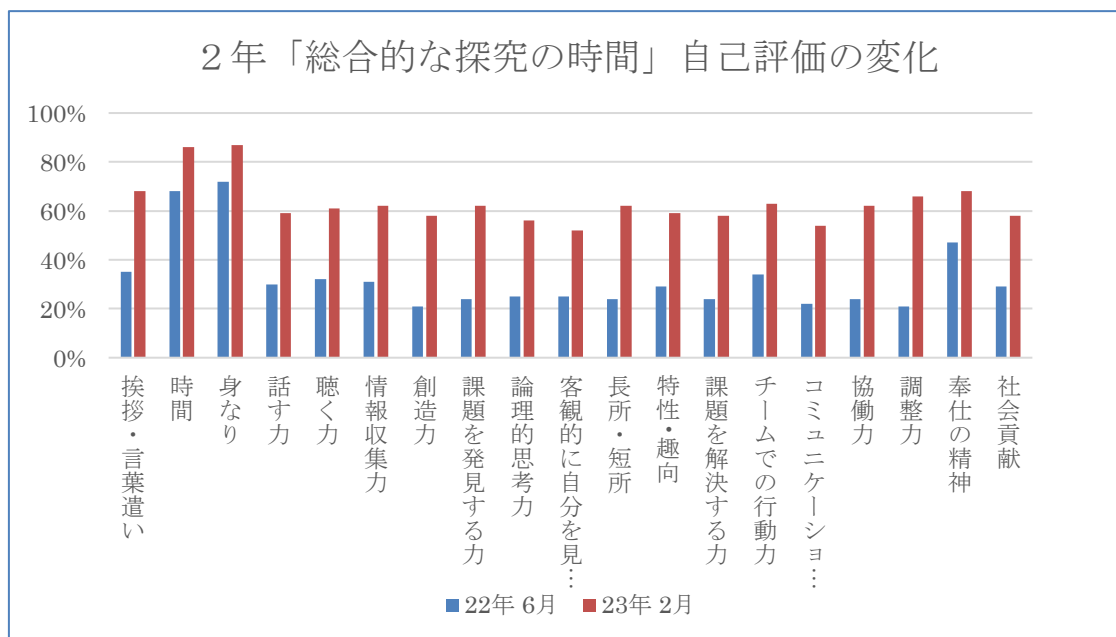
ポイントアップ上位「チームでの行動力」「課題を解決する力」であった。探究を行う中で、チームで協力して課題を解決していく力が身についたと感じる生徒が多く存在していることが分かる。

2 年生

「総合的な探究の時間」の成果

インターンシップ報告会を見ると、地元企業の協力のもと行ったインターンシップを通して「仕事は誰かの役に立っていること」や「他人の喜びが自分の喜びになることが仕事のやりがいにつながる」ことを学び自己の将来に繋げていきたいと考える生徒が多いことが分かった。アンケート結果を、(表 1 1)、(表 1 2)に示す。

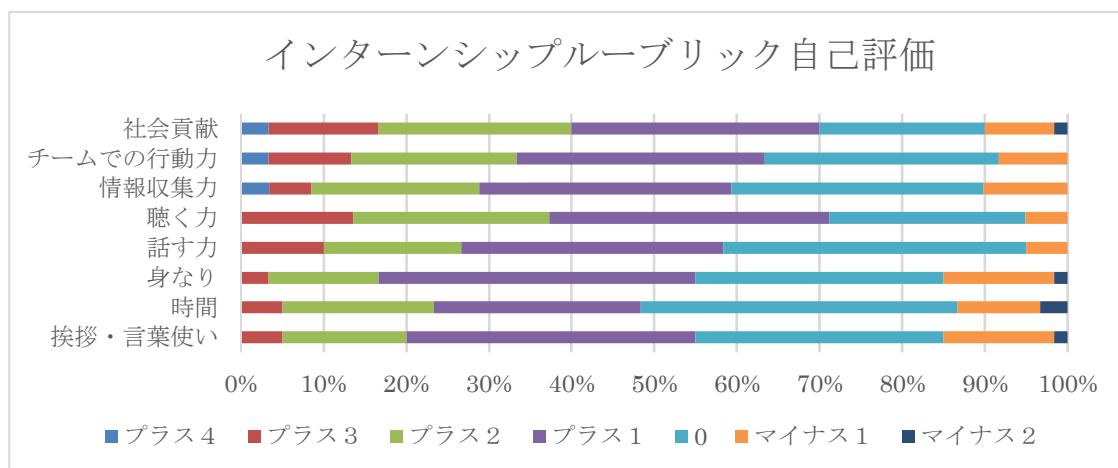
表 1 1)「総合的な探究の時間 自己評価ルーブリック」の結果



「総合的な探究の時間自己評価ルーブリック」が level 3,level 4 に達している割合を 22 年 6 月と 23 年 2 月を比較した。「課題を解決する力」「長所・短所」「協働力」で 38%と伸び率が高い。

また、基礎力(「挨拶・言葉使い」～「情報収集力」)が伸びていることも特徴的である。

表 1 2) インターンシップ 自己評価ルーブリック



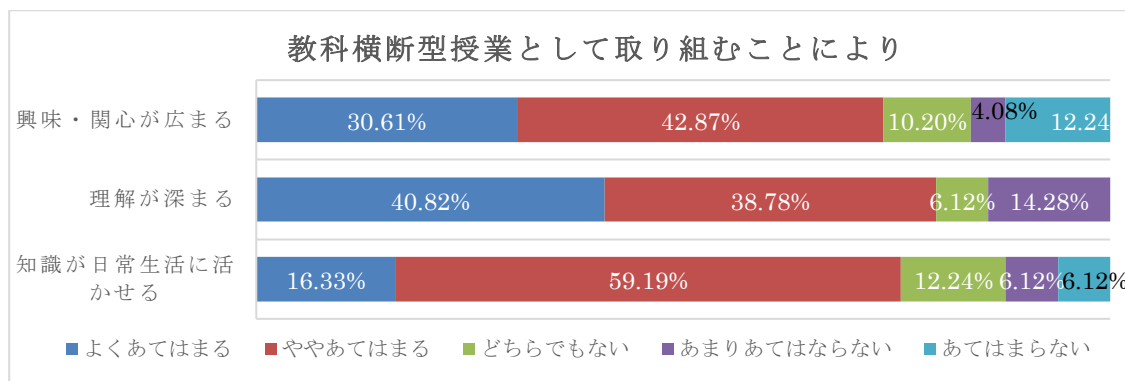
ポイントアップ上位「聴く力」「社会貢献」は 70%以上の生徒が伸びている。また 1 年生で伸びが少なかった「話す力」も大きく伸びている。

「教科横断型授業」の成果

教科横断型の授業行うことで生徒の興味・関心が広がり、理解が深まったことが分かる。また、75%以上の生徒が得た知識を日常に活かせると考えている。得た知識が日常生活に活かされると実感させることは「学ぶ意欲」に繋がると考える。

教科横断型授業を行なった後のアンケート、感想を(表 1 3)に示す。

表 1 3) 「教科横断型授業」アンケート結果



自由記述

「独立した教科として取り組むより色々な方向から知識を身につけることが出来たと思う」

「教科同士を組み合わせることですべての授業よりも楽しく学習することができたと思う。一回の授業で二種類のことを学べた」

「普段何も考えずにただ問題を解いていたけど、ある教科とコラボをする事でこういう事と繋がっていると気づけて良かった」

「他の教科と組み合わせることで、それを求める方法や、結果についてこれからの自分と照らし合わせて考えることができたからとてもいい機会になったと思う」

6. 今後の課題・展望

今後の課題

(1)「総合的な探究の時間」

2020 年度に一般助成、2021 年度に特別研究指定校を受け 3 年間で「総合的な探究の時間」のプログラムが完成した。

自己評価ルーブリックの結果を考察すると、インターンシップにより「基礎力」が身につけていることが分かる。次年度も 1 年生「SDGs・V 市役所」「日星ゼミ」 2 年生「インターンシップ」を行う。しかし 1 年生の到達目標である「基礎力を全て level 3」を考えると、来年度も調査を続け、1 年生、2 年生のプログラムを逆にすることも視野に入りたい。

今後、生徒たちが「地方創生」の課題をより『自分ごと』として捉えられるように 3 年間のプログラムを改良する。そのためには教員の意識を揃える必要がある。もう一度、SDGs の考え方の研修を行い、ねらいと方法を再検討する。それに基づきプログラムを再構築していきたい。

(2)「教科横断型授業」の充実

学習指導要領が改定された後の「教科横断型授業」についてもいくつかの実践例ができた。

「教科横断型授業」を行うことにより生徒の理解度が向上することは分かった。また、教科を超えて物事を多角的にみることの大切さについても学習することができた。

今後 3 年間の SDGs を軸とした教科横断型授業の教育プログラムを、教科横断コーディネーターを中心として作成したい。

今後の展望

本研究を通して、生徒に「自分で判断し行動できる力」「仲間と協働して働く力」そして何よりも、「足元のくらしや地域社会の将来を『自分ごと』としてとらえる意識を育てる」ことが大

切だと改めて感じた。

2年生のインターンシップから派生した取組として、地元根差したスイーツ「ヅルいいプリン」を開発するために、ICTを駆使しクラウドファンディングに挑戦し、目標金額を大きく上回る商品開発のための寄付をいただいた事例があげられる。

また、課外活動で、本来なら舞鶴の専門学校に入学予定のウズベキスタンの生徒とオンラインツールを用い日本語の学習を、継続的にサポートをした事例もある。

このようにICTを活用すれば、どこにいても、だれとでもインターネットを通じて繋がれること。更には、「学校の枠」を超えた人やモノとのつながりを生み出し、活動の幅を広げ、フィードバックを直接感じ取ることができるなど、実感をもって学習の当事者になれる大きな役割を果たすことが分かった。こうした実践的な活動を積み重ねることで達成感を味わい、生徒にとっては、学習活動が、『自分ごと』となり、そうしたことができるようになった自分への自信も深まったと考えられる。

教員においても、他教科とつながることで多角的に物事を考える生徒を育て、また、生徒の思考や活動の場を学校外へ広げるなど、新しい地域づくりの当事者となるきっかけとなったのではないだろうか。

SDGsの「誰一人取り残さない」の目標を常に意識し、実践化できる生徒を育ていくために「ユネスコスクールへの加盟」を契機に、これまでの活動の成果に立って、よりグローバルなネットワークの活用や他の高校や中学校との連携を進め、京都府北部のICT活用研究の中心校としての役割を果たしていきたい。

7. おわりに

舞鶴市を始め多くの企業・団体の協力によりこの研究実践ができたことに感謝します。また、折々に学校訪問しアドバイスをいただいた関西大学小柳和喜雄教授、こうした機会をいただいたパナソニック教育財団にも感謝を申し上げます。

協力いただいた企業・団体名

一般社団法人 KOKIN 様, シンク・アンド・アクト株式会社様, 株式会社坂根工務店様,
京都府漁業協同組合様, 有限会社幾久鶴様, 株式会社京栄電工様, 株式会社京栄テック様,
株式会社ツクヨミラシン様, インフォニック株式会社様, 岡安設備工業有限会社様,
京都ケータリング株式会社様, 特別養護老人ホーム安寿苑様, 株式会社井上空調システム様,
株式会社西谷通信工業様, 舞鶴ユネスコ協会様, 学校法人聖ヨゼフ学園舞鶴聖母幼稚園様,

8. 参考文献

- ・「人口減少×デザイン」(2015) 笥祐介 英知出版
- ・「学びのイノベーション事業実証研究報告書」(2014) 文部科学省
- ・「算数・数学を活用する力をはぐくむ問題例」(2010) 青森県教育庁学校教育課程小中学校指導グループ